

津村 敏雄

要旨

The main purpose of this paper is intended as a comparison of English education in Japan with that in South Korea. The author analyzed the curricula of both countries, because few studies have focused exclusively on curricula in Europe or the U.S.A., as represented in the annual report by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, sufficient studies regarding Asian countries' curricula are not available. Nevertheless, a comparative study of English education in Japan and that in South Korea will yield many insights: they have similar EFL learning environments; moreover, linguistic characteristics of the Korean language are similar to those of the Japanese language. Regarding analyses of the respective curricula, the author classified the stages into three: “the dawning”, “the age of sentence-pattern”, and “the age of communication.” Thereafter, their changes of objectives and language materials are addressed herein. Although educational practices emphasizing grammatical competence have been performed for a long time in South Korea as well as Japan, now that “communication” has been set as the objective of the second latest curriculum, both countries have given priority to communication activities that raise consciousness of language-use and function.

キーワード：日本，韓国，英語教育，教育課程，学習目標，言語材料

1. はじめに

日本の英語教育と韓国の英語教育には学習環境や教育制度において類似点が多い。例えば、EFL (English as a Foreign Language) の学習環境において、教育課程（日本：『学習指導要領』、韓国：『교육과정 (教育課程)』）に準拠した英語教育が実践されている¹⁾。この他、日常生活で英語を使う機会が乏しいこと、6-3-3 制の学校教育制度、検定教科書制度、母語の統語的類似性（ハングルも日本語と同じ SOV 言語である）など、韓国の英語教育と日本の英語教育は酷似していることから日本の英語教育の研究対象として注目されよう。ところが、過年度の文部科学省による研究報告書は欧米諸国の研究に重点が置かれる傾向にあり、アジア諸国の教育課程や教育制度に関する研究は十分とは言えない状況にある。また、韓国の教育課程に関する先行研究には、伊藤 (1997)、清永 (2000)、大谷 (2001)、木村 (2002) などがある。

るが、何れも韓国が小学校への英語教育の導入を決定してからの旧課程の第6次『교육과정 (教育課程)』と現行の第7次『교육과정 (教育課程)』に関する研究であり、それ以前の韓国の教育課程に関する研究や現行に至るまでの英語の教育課程の変遷に関する研究はほとんどなされて来なかった。そこで本研究では、先行研究を補完してさらに新たな知見を得るべく、戦後から現在に至るまでの日本と韓国の教育課程がどのような変遷を遂げてきたのかを「目標」と「言語材料」に焦点を当てた比較分析を行う。なお、現行の教育課程に至るまでに、日本の教育課程(『学習指導要領』)は、中学校課程が6回、高等学校課程が7回の改訂が行われ、韓国の教育課程(『교육과정 (教育課程)』)は、中学校課程と高等学校課程は7回の改訂が行われている²⁾。本稿では、日本と韓国の教育課程を津村(2007)の分類に倣って、戦後まもなくの時期を「草創期」、Pattern Practice に代表される文型練習が盛んに行なわれた時期を「文型・文法期」、そしてコミュニケーション能力を重視する現在を「コミュニケーション期」と3つの時期に分けて論じることとする(表1を参照)。

	日本の教育課程	韓国の教育課程
草創期	昭和22年(1947)『学習指導要領』 昭和26年(1951)『中学校・高等学校学習指導要領』 昭和31年(1956)『高等学校学習指導要領』	(1946)『교수요목』
文型・文法期	昭和33年(1958)『中学校学習指導要領』 昭和35年(1960)『高等学校学習指導要領』 昭和44年(1969)『中学校学習指導要領』 昭和45年(1970)『高等学校学習指導要領』 昭和52年(1977)『中学校学習指導要領』 昭和53年(1978)『高等学校学習指導要領』	제1차(1954)『중학교교육과정』 제1차(1954)『고등학교교육과정』 제2차(1963)『중학교교육과정』 제2차(1963)『고등학교교육과정』 제3차(1974)『중학교교육과정』 제3차(1974)『고등학교교육과정』 제4차(1981)『중학교교육과정』 제4차(1981)『고등학교교육과정』 제5차(1988)『중학교교육과정』 제5차(1988)『고등학교교육과정』
コミュニケーション期	平成元年(1989)『中学校学習指導要領』 平成元年(1989)『高等学校学習指導要領』 平成10年(1998)『中学校学習指導要領』 平成11年(1999)『高等学校学習指導要領』	제6차(1992)『중학교교육과정』 제6차(1992)『고등학교교육과정』 제7차(1997)『중학교교육과정』 제7차(1997)『고등학교교육과정』

表1 戦後の日本の『学習指導要領』と韓国の『교육과정 (教育課程)』(中学校・高等学校)の変遷

2. 草創期

戦後まもなくの草創期は、日本も韓国も米軍の占領統治下での民主化政策の一環としての教育改革が米軍主導で断行されることになり、アメリカ教育使節団が提出した報告書に基づいて新しい教育課程が作成された。日本では1947年に昭和22年『学習指導要領(試案)』が、韓国では1946年に『교수요목(教授要目)』(『교육과정(教育課程)』の前身)が発表された。ともに「目標」を掲げた程度の非常に簡素なもので、「言語材料」(「学習語彙」や「文法事項」など)に関する具体的な記述はなく、かつ法的拘束力のない「試案」に過ぎなかった。

2. 1 草創期の日本の教育課程

日本では、連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）の要請で派遣されたアメリカ教育使節団の報告書をもとに新しい教育課程の作成が行われた。報告書の内容は、教育の目的および内容、国語の改革、初等および中等教育の行政、教授法と教師養成教育、成人教育、高等教育など多岐に及ぶが、国語のローマ字化などを除けば、国定教科書制度の廃止、6-3-3制、男女共学、無償教育など、ほとんどの提言が実施されている。1947年、第二次世界大戦後の新しい教育課程として昭和22年『学習指導要領（試案）』が発表された。体裁はA5判の28ページで、「目標」「教材」「学習指導法」「考査」「各学年の指導法」で構成されている。

「目標」には、「4 技能の育成」と「英米文化の理解」が掲げられた（図1を参照）。英語を話す人々と同じように頭脳を働かせる習慣を作ることが英語学習には不可欠で、かつ英米人の価値観の摂取が国際親善とみなされた。つまり、「英米人の思考様式を忠実に模倣すること」と「英米文化を受容すること」、いわば「同化主義」が戦後の日本の英語教育の出発点となった。当時の教科書『Jack & Betty』（開隆堂）はアメリカ人のJackとBettyを主人公としてアメリカを舞台にした学校生活や家庭生活で展開する話材と英米文学作品で編まれている。

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">一 英語で考える習慣を作ること。二 英語の聴き方と話し方を学ぶこと。三 英語の読み方と書き方を学ぶこと。四 英語を話す国民について知ること、特に、その風俗習慣および日常生活について知ること。 |
|--|

図1 日本の教育課程 昭和22年『学習指導要領（試案）』（中学校・高等学校）の「目標」

1951年、初めての改訂となる昭和26年『学習指導要領（試案）』（『中学校・高等学校学習指導要領 外国語科英語編』）も法的拘束力のない「試案」として発表された。前回と同様に中学校課程と高等学校課程の合本により作成されており、体裁はA5判759ページにも及び、「目標」「教育課程」「教材」「学年別の指導計画」「評価」で構成されている。

<p>聴覚と口頭との技能および構造形式の学習を最も重視し、聞き方・話し方・読み方および書き方に熟達するのに役立ついろいろな学習経験を通じて、「ことば」としての英語について、実際的な基礎的な知識を発達させるとともに、その課程の中核として、英語を常用語としてしている人々、特にその生活様式・風俗および習慣について、理解・鑑賞および好ましい態度を発達させること。</p>
--

（昭和26年『中学校学習指導要領（試案）』）

<p>中学校の基礎の上に、生徒および地域社会の必要および関心に応じて異なる技能を重視し、聞き方・話し方・読み方および書き方に熟達するのに役立ついろいろな学習経験を通じて、「ことば」としての英語について、技能および知識を発達させるとともに、その課程の中核として、英語を常用語としてしている人々、特にその生活様式・風俗および習慣について、理解・鑑賞および好ましい態度を発達させること。</p>
--

（昭和26年『高等学校学習指導要領（試案）』）

図2 日本の教育課程 昭和26年『学習指導要領』（中学校・高等学校）の「目標」

「目標」には、「4 技能の育成」と「英米文化の理解」に加えて、新たに「構造形式の学習」や「ことばとしての英語」と「言語形式」を重視することが盛り込まれた（図 2 を参照）。そして、「言語材料」について初めて「学習語彙」が巻末の付録部分で言及されるようになり、中学校課程は 1200-2300 語（第 1 学年 300-600 語、第 2 学年 400-700 語、第 3 学年 500-1000 語）で、高等学校課程は 2100-4500 語（第 1 学年 600-1500 語、第 2 学年 700-1500 語、第 3 学年 800-1500 語）で、中学校と高等学校の合計は 3300-6800 語を目安とすることが提示された。

2. 2 草創期の韓国の教育課程

韓国では、日本軍から解放されると、日本と同様に米軍の占領統治下における民主化政策の一環として教育改革が行われ、アメリカ教育使節団の報告書に基づいて新しい教育課程が作成されることとなった。1946 年、戦後の新しい教育課程として『교수요목（教授要目）』が発表された。体裁は A5 判で僅か 2 ページのハンゲルと漢字の混合文で記された非常に簡素なもので、「教授要旨」「教授方針」「教授事項」「教授上の注意」で構成されている。

英語를 理解하고 活用할 基礎實力을 養成하여, 外國에 關한 識見을 넓히고, 우리 文化의 發展을 期함. (英語を理解し活用できる基礎力を養成して外国に関する識見を広げるとともに我が国の文化を發展させる。)

- (1) 理解와 發表가 可能하도록 英語를 活用시킴으로 會話力과 作文力을 養成함. (理解して発表できるように英語を用いて会話力と作文力を養成する。)
- (2) 翻譯, 文法, 等を 通하여 讀書力을 增進함. (翻訳や文法などを通じて読書力を増進する。)
- (3) 發音, spelling, 語法, 等に 留意하게 하여 言語에 對한 常識을 얻게 함. (発音, spelling, 語法などに留意して言語に対する常識を体得する。)
- (4) 平易한 英語에서 Shakespeare 時代까지의 文으로 精讀에 多讀으로 興味, 教養, 實用의 價値를 恒常 念頭に 두고, 指導할 것. (平易な英語で Shakespeare 時代の文学を精読と多読して興味を養い, 実用的価値を常に念頭に置き指導する。)

図 3 韓国の教育課程『교수요목（教授要目）』（中学校・高等学校）の「目標」³⁾

「目標」には、「英語を理解し使用する能力の育成」と「外国（英米）文化の理解による自国文化の發展」が掲げられている（図 3 を参照）。下位目標には、「翻訳と文法」、「読書力の増進」、「精読と多読」とあるように、4 技能の育成の中でもとりわけ読解力を重視しており、Shakespeare 文学などの英米文学作品の読解による英米文化の理解を奨励している。なお、系統的な学習により高級中学（現在の高等学校）第 2 学年までに中等程度の文法を完了することとしているが、「言語材料」（「学習語彙」や「文法事項」など）の具体的な項目については明記されていなかった⁴⁾。

3. 文型・文法期

草創期の教育課程は米軍主導で作成されたこともあり、次第に両国ともに自主改訂への機

運が高まるようになった。なお、新しく改訂される教育課程から日本の『学習指導要領』は文部省が、韓国の『교육과정 (教育課程)』は文教部が告示する法令となったことを契機として「言語材料」（「学習語彙」「文法事項」など）の具体的な数値や細目が規定された。

3. 1 文型・文法期の日本の教育課程

1958年、中学校課程の2回目の改訂となる昭和33年『中学校学習指導要領』が、1960年には高等学校課程の3回目の改訂となる昭和35年『高等学校学習指導要領』が告示された。体裁は中学校課程がA5判21ページ、高等学校課程がA5判20ページで、「目標」「内容」（「言語材料」「題材」「学習活動」）「指導上の留意事項」で構成されている。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1 外国語の音声に慣れさせ、聞く能力および話す能力の基礎を養う。 2 外国語の基本的な語法に慣れさせ、読む能力および書く能力の基礎を養う。 3 外国語を通して、外国語を日常使用している国民の日常生活、風俗習慣、ものの見方などについて基礎的な理解を得させる。
(昭和33年『中学校学習指導要領』) |
| <ol style="list-style-type: none"> 1 外国語の音声に習熟させ、聞く能力および話す能力を養う。 2 外国語の基本的な語法に習熟させ、読む能力および書く能力を養う。 3 外国語を通して、その外国語を日常使用している国民について理解を得させる。
(昭和35年『高等学校学習指導要領』) |

図4 日本の教育課程 昭和33/35年『学習指導要領』（中学校・高等学校）の「目標」

「目標」には、「聞く能力と話す能力の育成」「読む能力と書く能力の育成」「外国語使用国民の理解」の3点が掲げられた（図4を参照）。そして「言語材料」には、「学習語彙」の数値のみならず、「必修語彙」520語の一覧表が添付されるとともに、「文型」と「文法事項」が学年別に配当されるようになった（図5を参照）。「学習語彙」は、中学校課程では、1100-1300語（第1学年300語、第2学年400語、第3学年400-600語、全学年のうち「必修語彙」520語）、「文法事項」は20項目（第1学年5項目、第2学年8項目、第3学年7項目）、「文型」は36種類（第1学年12種類、第13種類、第3学年11種類）、高等学校課程は、「学習語彙」は1500-3600語（「英語A」1500語、「英語B」3600語）、「文法事項」は10-14項目（「英語A」10項目、「英語B」14項目）が指定されている。

- | | |
|--|--|
| <p>[第2学年]</p> <ol style="list-style-type: none"> a) 主語+動詞の文型 <ul style="list-style-type: none"> ・主語+動詞+副詞として用いられた不定詞（結果を表わす場合を除く） b) 主語+動詞+補語の文型 <ul style="list-style-type: none"> ・主語+be 動詞以外の動詞+名詞 ・主語+be 動詞以外の動詞+形容詞 c) 主語+動詞+目的語の文型 <ul style="list-style-type: none"> ・主語+動詞+動名詞 ・主語+動詞+不定詞 ・主語+動詞+how+不定詞 | <ul style="list-style-type: none"> ・主語+動詞+thatで始まる節 d) 主語+動詞+間接目的語+直接目的語の文型 <ul style="list-style-type: none"> ・主語+動詞+間接目的語+直接目的語 ・主語+動詞+目的語+to+名詞または代名詞 e) 主語+動詞+目的語+補語の文型 <ul style="list-style-type: none"> ・主語+動詞+目的語+名詞 ・主語+動詞+目的語+形容詞 ・主語+動詞+目的語+現在分詞 f) その他の文型 <ul style="list-style-type: none"> ・主語+ask, tell, wantなどの動詞+目的語+不定詞 |
|--|--|

図5 日本の教育課程 昭和33年『中学校学習指導要領』の「文型」

1969年、中学校課程の3回目の改訂となる昭和44年『中学校学習指導要領』が、翌1970年には高等学校課程の4回目の改訂となる昭和45年『高等学校学習指導要領』が告示された。体裁は中学校課程がA5判24ページ、高等学校課程がA5判18ページで、構成は「目標」「内容」「内容の取り扱い」で構成されている。

外国語を理解し表現する能力の基礎を養い、言語に対する意識を深めるとともに、国際理解の基礎をつちかう。このため、

- 1 外国語の音声および基本的な語法に慣れさせ、聞く能力及び話す能力の基礎を養う。
- 2 外国語の文字および基本的な語法に慣れさせ、読む能力及び書く能力の基礎を養う。
- 3 外国語を通して、外国の人々の生活やものの見方について基礎的な理解を得させる。

(昭和44年『中学校学習指導要領』)

外国語を理解し表現する能力を養い、言語に対する意識を深めるとともに、国際理解の基礎をつちかう。このため、

- 1 外国語の音声、文字および基本的な語法に慣れさせ、聞き、話し、読み、書く能力を養う。
- 2 外国語を通して、外国の人々の生活やものの見方について理解を得させる。

(昭和45年『高等学校学習指導要領』)

図6 日本の教育課程 昭和44/45年『学習指導要領』(中学校・高等学校)の「目標」

「目標」には、「外国語を理解し表現する能力の育成」「言語に対する意識を深める」「国際理解の育成」の3点が掲げられている(図6を参照)。新たに「言語に対する意識」という文言が付加されて「英米文化の理解」から「国際理解」へと改められた。そして「言語材料」は学習内容の精選の方針を受けて「学習語彙」と「文法事項」が削減されることとなった。中学校課程では、「学習語彙」は950-1100語(第1学年300-350語、第2学年300-350語、第3学年350-400語、全学年のうち「必修語彙」610語)、「文法事項」は21項目(第1学年7項目、第2学年8項目、第3学年6項目)、高等学校課程では、「学習語彙」は2400-3600語(「英語A」1200-1500語、「英語B」1200-2100語)、「文法事項」は9-12項目(「英語A」9項目、「英語B」12項目)となった。

1977年、中学校課程の4回目の改訂となる昭和52年『中学校学習指導要領』が、1978年には、高等学校課程の5回目の改訂となる昭和53年『高等学校学習指導要領』が告示された。体裁は中学校課程がA5判11ページ、高等学校課程がA5判6ページで、構成は「目標」「内容」「内容の取り扱い」で構成されている。

外国語を理解し、外国語で表現する基礎的な能力を養うとともに、言語に対する関心を深め、外国の人々の生活やものの見方などについて基礎的な理解を得させる。

(昭和52年『中学校学習指導要領』)

外国語を理解し、外国語で表現する能力を養うとともに言語に対する関心を深め、外国の人々の生活やものの見方などについて理解を得させる。

(昭和53年『高等学校学習指導要領』)

図7 日本の教育課程 昭和52/53年『学習指導要領』(中学校・高等学校)の「目標」

「目標」には、「外国語で表現する能力」「言語に対する関心」「国際理解」の3点を掲げている(図7を参照)。前回の「言語に対する意識」から「言語に対する関心」へと表記が改められており、より積極的な言語学習に対する目標を掲げている。そして「言語材料」は学習内容の精選の方針に伴って「学習語彙」と「文法事項」は大幅に削減されることになる。中学校課程は「学習語彙」が900-1050語(第1学年300-350語、第2学年300-350語、第3学年300-350語、全学年のうち「必修語彙」490語)で、「文型」が19種類(第1学年7種類、第2学年6種類、第3学年6種類)、「文法事項」が13項目(第1学年3項目、第2学年6項目、第3学年4項目)となり、高等学校課程は「学習語彙」が1400-1900語(「英語Ⅰ」400-500語、「英語Ⅱ」600-700語、「英語ⅡB」400-700語)、「文型」が10種類(「英語Ⅰ」5種類、「英語Ⅱ」5種類)、「文法事項」が12項目(「英語Ⅰ」5項目、「英語Ⅱ」7項目)となった。

3. 2 文型・文法期の韓国の教育課程

韓国でも米軍主導による教育課程(『교수요목(教授要目)』)を自主改訂しようとする機運が高まったが、朝鮮戦争1950-53が勃発したことで実質的な作業は遅れることとなった。1954年、初めての改訂となる第1次『중학교교육과정(中学校教育課程)』と第1次『고등학교교육과정(高等学校教育課程)』が文教部から告示された。体裁は中学校課程がB5判21ページ、高等学校課程がB5判20ページで、「価値と目的」「基本方針」「原則」「課程」「運営上の注意」で構成されている。

<p>(1) 영어의 성음, 어휘, 문법, 어태 서식을 이해 체득사킴으로써 국어와의 상이점을 이해하는 능력을 기른다. (英語の音声、語彙、文法、語態の書式を体得することによって、国語との相違点を理解する能力を育てる。)</p> <p>(2) 피아 간의 사그, 감정, 예의, 풍속, 습관, 역사, 자연 환경과 기타 문물 제도의 상이점을 이해 체득사킨다. (相互間の思考、感情、礼儀、風俗、習慣、歴史、自然環境とその他の文物や制度の相違点を理解する。)</p> <p>(3) 상기 모든 상이가 있음에도 불구하고 호상 존중은 공룡된 의무이며, 정의는 인류 생활 공룡의 기본 원칙임을 이해 체득사킨다. (上記のような相違点があろうとも相互尊重は人類共通の義務であり正義は生活の基本原則であることを理解する。)</p> <p>(4) 현대 영어의 평이하고 비근한 어휘로 구성된 긴이한 문형을 체득사키어 거초 영어의 이해력과 발표력을 가 지게 한다. (現代英語の平易で身近な語彙で構成された簡易な文型を体得し基礎的な英語の理解力と発表力を養う。)</p> <p style="text-align: right;">(제1차 『중학교교육과정』)</p> <p>(1) 上記(1)と同じ。 (2) 上記(2)と同じ。 (3) 上記(3)と同じ。 (4) 현대 영어의 상용 어휘로 구성된 구문을 체득사키어 보통 사용하는 영어의 이해 력과 발표력을 가지게 한다. (現代英語の常用語彙で構成された構文を体得し日常使う英語の理解力と発表力を養う。)</p> <p style="text-align: right;">(제1차 『고등학교교육과정』)</p>

図8 韓国の教育課程 第1次『교육과정(教育課程)』(中学校・高等学校)の「目標」

「目標」には、中学校課程および高等学校課程ともに、「国語との対照による学習」、「英米文化の理解」「相互尊重の精神」「文型・構文による学習」の4点を掲げている(図8を参照)。そして、「言語材料」には初めて「学習語彙」が規定されるようになり、中学校課程は1500語(第1学年400語、第2学年500語、第3学年600語)、高等学校課程は学年ごとではなく3学年全体で4000語と指定された⁵⁾。

1963年、2回目の改訂となる第2次『중학교교육과정(中学校教育課程)』と第2次『고등학교교육과정(高等学校教育課程)』が告示された。体裁は中学校課程がB5判5ページ、高等学校課程がB5判7ページで、「目標」「指導内容」「指導上の留意点」で構成されている。「指導内容」は「聞くこと・話すこと」「読むこと」「書くこと」に分割された。なお、韓国は第2外国語教育にも積極的で『교수요목(教授要目)』のときに設置されていたドイツ語とフランス語に新たに中国語が加わり3科目となった⁶⁾。

- | |
|---|
| <p>(1) 일상 생활에서 사용하는 간단한 영어를 듣고 말하는 능력을 기른다. (日常生活で使う簡易な英語を聞いて話す能力を育てる。)</p> <p>(2) 영어의 초보적인 어법에 익숙케 하여 간단한 일상 영어를 읽고 쓰는 능력을 기른다. (英語の初歩的な語法を習熟させて簡易な日常英語を読み書きできる能力を育てる。)</p> <p>(3) 영어 학습을 통하여 영어 국민들의 일상 생활과 그들의 풍속 습관을 이해케 하고 국제적 이해와 협조심을 기른다. (英語学習を通して英語国民の日常生活と風俗習慣を理解して国際理解と協調心を育てる。)(제2차『중학교교육과정』)</p> |
| <p>(1) 일상 생활에서 사용하는 언어를 듣고 말하는 능력을 기른다. (日常生活で使う言語を聞いて話すことができる能力を培う。)</p> <p>(2) 외국어의 기본적인 어법을 습득시켜 읽고 쓰는 능력을 기른다. (外国語の基本的な語法を習得させて読んで書くことができる能力を培う。)</p> <p>(3) 우리 나라의 문화를 외국어를 통하여 소개하는 기초적 능력을 기른다. (我が国の文化を外国語を通じて紹介することができる基礎的な能力を培う。)</p> <p>(4) 외국어의 학습을 통하여 외국과 외국인에 대한 이해를 증진시켜 국제적 협조심화 사물에 대한 견식과 판단력을 심화 확장한다. (外国語学習を通して外国と外国人に対する理解を増進させることで国際強調心に対する見識と判断力を深める。)</p> <p>(제2차『고등학교교육과정』)</p> |

図9 韓国の教育課程 第2次『교육과정(教育課程)』(中学校・高等学校)の「目標」

「目標」には、中学校課程では「聞いて話す能力の育成」、「読み書きする能力の育成」、「英語国民の日常生活と風俗習慣の理解」の3点を、高等学校課程ではさらに「我が国の文化の紹介」を加えた4点を掲げている(図9を参照)。「英語国民の日常生活と風俗習慣の理解」、すなわち、英米文化を理解することで国際理解と協調心が育成されるとみなされた。例えば、当時の教科書『Tom and Judy』(대동문화사)は、日本の『Jack & Betty』(開隆堂)の内容と極めて酷似しており、アメリカ人の Tom と Judy を主人公としたアメリカでの学校生活と家庭生活が展開する話材と英米文学作品で構成されている。そして「言語材料」は、「学習語彙」は中学校課程が1050-1450語(第1学年300-400語、第2学年350-450語、第3学年400-600

語)、高等学校課程が「英語Ⅰ」1800-2500語、「英語Ⅱ」2300-2900語に削減されている。

1974年、3回目の改訂となる第3次『중학교교육과정(中学校教育課程)』と第3次『고등학교교육과정(高等学校教育課程)』が告示された。体裁は中学校課程がB5判14ページ、高等学校課程がB5判6ページで「目標」「内容」「指導上の留意点」で構成されている。

「目標」には「英語4技能の育成」「国際社会での自己認識」「英米文化の理解と自国文化の発展」の3点が掲げられている(図10を参照)。新たに追加された「国際社会での自己認

<p>(1) 영어 학습을 통하여, 국제 사회 속에서의 자신을 인식하게 하고, 장차 국 제적 활동에 참여할 수 있는 바탕을 마련하게 한다. (英語使用の初歩的な技能を育て、簡単な英語を理解して生活周辺に関する内容を簡易な英語を使って効果的に表現することができるようにする。)</p> <p>(2) 영어 학습을 통하여, 국제 사회 속에서의 자신을 인식하게 하고, 장차 국 제적 활동에 참여할 수 있는 바탕을 마련하게 한다. (英語学習を通して国際社会の中での自身を認識させて将来国際的活動に参加できる基礎を準備する。)</p> <p>(3) 영어 학습을 통하여, 영어 사용 국 민들의 사고 방식과 문화를 이해하게 하고, 이를 통하여 우비 문화의 가치를 더욱 깊이 인격하게 함으로써 민족 문화 발전에 기여할 수 있는 기본적 자질을 기른다. (英語学習を通して英語使用国民の考え方と文化を理解するとともに、我が国文化的価値をより深く認識することで民族文化発展に寄与できる基本的資質を育てる。)</p> <p style="text-align: right;">(제3차 『중학교교육과정』)</p> <p>(1) 외국어의 기본 어법을 습득시켜 듣기, 읽기, 말하기, 쓰기의 종합 즉인 어학 기능을 기른다. (外国語の基本語法を習得させて、聞くこと・読むこと・話すこと・書くことの総合的な語学技能を育てる。)</p> <p>(2) 외국어의 학습을 통하여 외국과 외국인에 대한 이해를 증진시켜 국제적 협조심을 기르고, 사물에 대한 견식을 넓혀 우리 스스로의 발전을 도모하도록 한다. (外国語学習を通じて外国と外国人に対する理解を増進させ国際的な協調心を育てることで事物に対する見識や判断力を深化・拡張する。)</p> <p>(3) 외국어를 통하여 우리 나라의 문화와 현황에 대한 개략적인 소개를 할 수 있는 기초적 능력을 기른다. (外国語を通じて我が国の文化と現況を概略的に紹介することができる基礎的な能力を育てる。)</p> <p style="text-align: right;">(제3차 『고등학교교육과정』)</p>
--

図10 韓国の教育課程 第3次『교육과정(教育課程)』(中学校・高等学校)の「目標」

識」とは国際競争力のある国家の創造を企図して『국민교육헌장(国民教育憲章)』の精神を反映したものである⁷⁾。「言語材料」は、中学校課程では「学習語彙」が1050-1200語(第1学年300-350語、第2学年350-400語、第3学年400-450語で、全学年のうち「必修語彙」765語)、「文型」が45種類(第1学年10種類、第2学年15種類、第3学年20種類)、「文法事項」が52項目(第1学年18項目、第2学年16項目、第3学年18項目)、高等学校課程では、「学習語彙」は「英語Ⅰ」2000語、「英語Ⅱ」3200語となった。また、初めて「文型・文法事項」が指定され、「必修語彙」の一覧表も添付されるようになった(図11を参照)。

[第2学年]	
㉠	There + 동사 (動詞) + 주어 (主語) + [부사구 (副詞句)]
㉡	Here + 동사 (動詞) + 주어 (主語)
㉢	주어 (主語) + 동사 (動詞) + 형용사 (形容詞)
㉣	주어 (主語) + 동사 (動詞) + 목적어 (目的語) + to / for + 목적어 (目的語)
㉤	주어 (主語) + 동사 (動詞) + that 절 (節)
㉥	주어 (主語) + 동사 (動詞) + 목적어 (目的語) + 부정사 (不定詞)
㉦	주어 (主語) + 동사 (動詞) + to 부정사 부사적 용법 (不定詞の副詞的用法)
㉧	주어 (主語) + 동사 (動詞) + 목적어 (目的語) + to 부정사 (不定詞)
㉨	주어 (主語) + 동사 (動詞) + to 부정사 명사적 용법 (不定詞の名詞的用法)
㉩	주어 (主語) + 동사 (動詞) + 목적어 (目的語) + 부사구 (副詞句)
㉪	주어 (主語) + 동사 (動詞) + 동명사 (動名詞)

図 11 韓国の教育課程 第3次『중학교교육과정 (中学校教育課程)』의 「文型」

1981年、4回目の教育課程の改訂となる第4次『중학교교육과정 (中学校教育課程)』、第4次『고등학교교육과정 (高等学校教育課程)』が告示された。体裁は中学校課程が B5判 23 ページ、高等学校課程が B5判 6 ページで、中学校課程は学年別に、高等学校課程は科目別に、それぞれ「目標」「内容」「指導上の留意点」の3つの領域で構成されている。

영어의 사용 능력을 길러, 영미 문화의 이해함으로써 우리 문화 발전에 이바지하게 한다. (英語の使用能力を育て、英語使用国民の文化を理解することにより我が国の文化の発展に尽くすようにする。)

(1) 생활 주변 및 일반적인 화제에 관한 쉬운 영어를 이해하고 사용할 수 있는 능력을 기른다. (生活周辺及び一般的な話題に関する簡単な英語を理解して使用する能力を育てる。)

(2) 영어 상용 국관의 문화를 이해할 수 있는 바탕을 마련한다. (英語常用国民の文化を理解できる基礎を養う。)

(제 4 차 『중학교교육과정』)

외국어 사용 능력을 길러, 외국 문화를 이해함으로써 우리 문화 발전에 이바지한다. (外国語の使用能力を育て、外国文化を理解して我が国の文化の発展に貢献させる。)

(1) 생활 주변 및 일반적인 화제에 관한 외국어를 이해하고, 이를 사용할 수 있는 능력을 기른다. (生活周辺及び一般的な話題に関する外国語を理解して使用できる能力を育てる。)

(2) 외국 문화를 폭넓게 이해하게 하여 국제적인 안목을 넓힌다. (外国文化を広く理解して国際的な見識を育てる。)

(제 4 차 『고등학교교육과정』)

図 12 韓国の教育課程 第4次『교육과정 (教育課程)』 (中学校・高等学校)의 「目標」

「目標」には、「英語 (外国語) の技能の育成」と「英米 (外国) 文化の理解と自国文化の発展」が掲げられている (図 12 を参照)。高等学校課程で「外国文化を広く理解する」が新たに盛り込まれたのはソウル・オリンピック開催による韓国経済の躍進により、国際化社会に対応する人材を育成することが強く求められたという社会情勢の影響を受けたものである。そして、「言語材料」では、中学校課程の「学習語彙」は 1050 語 (第1学年 300 語、第2学年 350 語、第3学年 400 語、全学年のうち「必修語彙」730 語)、「文型」は 32 種類 (第1学年 7 種類、第2学年 10 種類、第3学年 15 種類)、「文法事項」は 52 項目 (第1学年 18

項目、第2学年16項目、第3学年18項目)、高等学校課程の「学習語彙」は「英語Ⅰ」1700語、「英語Ⅱ」3000語となった。

1988年、5回目の改訂となる第5次『중학교교육과정(中学校教育課程)』と第5次『고등학교교육과정(高等学校教育課程)』が告示された⁸⁾。体裁は中学校課程がB5判25ページ、高等学校課程がB5判7ページで、「目標」「内容」「指導上の留意点」で構成されている。日本の「ゆとり教育」に相当する「평균화정책(平準化政策)」が実施されることになり、「基礎教育の充実の強化」、「個々に応じた教育」、「情報化社会に対応する教育」が全体の改訂方針となり学習内容の見直しが行われている。しかしながら、日本の「ゆとり教育」とは異なり、中学校課程の学習事項を高等学校課程へと移行させる措置はとらずに中学校でひと通りの文法事項を学習するという韓国の英語教育の従来の基本方針は貫徹されている。

「目標」には、「英語の技能の育成」と「外国文化の理解」を掲げられるようになり、これまでの「英語使用国民の文化理解」から「外国文化の理解」へと表現が改められて英米文化の理解への傾注からの脱却が図られた(図13を参照)。また、中学校課程では言語表現の「正確さ」を、高等学校課程ではコミュニケーションできる能力を強調している。そして、「言語材料」では、中学校課程の「学習語彙」は1050語(第1学年300語、第2学年350語、第3学年400語、全学年のうち「必修語彙」753語)、「文型」は34種類(第1学年7種類、第2学年11種類、第3学年16種類)、「文法事項」は46項目(第1学年18項目、第2学年13項目、第3学年15項目)に、高等学校課程の「学習語彙」は「英語Ⅰ」1600語、「英語Ⅱ」3000語となった。

<p>쉬운 영어를 이해하고 생각과 느낌을 바르게 표현할 수 있는 기본 능력을 길러, 외국 문화를 올바르게 수용하고 무리 문화를 소개할 수 있는 바탕을 마련하게 한다. (簡単な英語を理解して思考と感情を正確に表現できる基本能力を育てるとともに、外国文化を受け入れて我が国の文化を紹介できる基礎を養う。)</p> <p>제5차 『중학교교육과정』)</p> <p>외국어로 의사 소통을 할 수 있는 능력을 기르고, 외국 문화를 이해함으로써 우리 문화 발전에 이바지하게 한다. (外国語で意思疎通できる能力を培うとともに、外国文化を理解することで我が国の文化の発展に貢献するようにする。)</p> <p>(1) 일상 생활과 일반적인 소재에 관한 외국어를 이해하고, 이를 사용할 수 있게 한다. (日常生活と一般的な話題に関する外国語を理解して使えるようにする。)</p> <p>(2) 외국 문화를 폭넓게 이해하여 국제적인 안목을 넓히게 한다. (外国文化を幅広く理解して国際的な視野を広げるようにする。)</p> <p>(제5차 『고등학교교육과정』)</p>
--

図13 韓国の教育課程 第5次『교육과정(教育課程)』(中学校・高等学校)の「目標」

4. コミュニケーション期

文型・文法期に盛んに実践された Pattern Practice は「オウム返し」に過ぎず言語習得には至らないと痛烈に批判されるようになり、1980年代にはヨーロッパで実践された Communicative Language Teaching が紹介されるようになった。また、Wilkins (1976) が新し

いシラバスとして「機能・概念シラバス (Notional-Functional Syllabus)」を発表したのに続き、Brumfit (1980) は従来の「文法シラバス」と「機能・概念シラバス」の中間的なものとして「統合シラバス (Integrated Syllabus)」を提唱した。文法項目を中心としながら螺旋状に機能表現も学習する形式はEFLとして英語を学習する日本や韓国には現実的なモデルとして支持されるようになった。

4. 1 コミュニケーション期の日本の教育課程

1989年、中学校課程の5回目の改訂となる平成元年『中学校学習指導要領』と、高等学校課程の6回目の改訂となる平成元年『高等学校学習指導要領』が告示された。体裁は中学校課程がA5判12ページ、高等学校課程がA5判11ページで、構成は「目標」「内容」「内容の取り扱い」である。ついに抜本的な大改訂が断行されることとなり、『学習指導要領』には初めて「コミュニケーション」という言葉が明記された。さらに、「言語活動」の「聞くこと・話すこと」の分割、「文法事項」の学年別配当の廃止、高等学校課程への「オーラル・コミュニケーション」の新設など、「コミュニケーション」を重視した英語教育への転換期となった。

外国語を理解し、外国語で表現する基礎的な能力を養い、外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てるとともに、言語や文化に対する関心を深め、国際理解の基礎を培う。
(平成元年『中学校学習指導要領』)

外国語を理解し、外国語で表現する能力を養い、外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てるとともに、言語や文化に対する関心を高め、国際理解を深める。
(平成元年『高等学校学習指導要領』)

図14 日本の教育課程 平成元年『学習指導要領』(中学校・高等学校)の「目標」

「目標」には、「外国語を理解し表現する能力の育成」「コミュニケーションを図ろうとする態度の育成」「言語や文化に対する関心を高める」「国際理解の育成」の4点が掲げられている(図14を参照)。新たに加えられた「コミュニケーションを図ろうとする態度の育成」とは、コミュニケーション能力を育成するにはコミュニケーション活動に積極的に取り組もうとする生徒の意欲的な態度を育むことが大切であることを唱えたものである。「言語材料」では、基礎・基本の重視の方針に従って「学習語彙」と「文型・文法事項」が精選された。中学校課程の「学習語彙」は1000語(「必修語彙」507語)、「文法事項」は8項目、「文型」は10種類となった。そして、コミュニケーション活動を重視した教材作成に対する配慮から「文型・文法」の学年別配当は廃止された。高等学校課程の「学習語彙」は「英語Ⅰ」500語、「英語Ⅱ」500語、「リーディング」900語、「文法事項」は8項目、「文型」も8項目となった。言語活動の「聞くこと」と「話すこと」には、「質問、指示、依頼、提案などに適切に応答すること」と記されるなど、場面や状況を意識したコミュニケーション能力の育成を求めている。

1998年、中学校課程の6回目の改訂となる平成10年版『中学校学習指導要領』と高等学校課程の7回目の改訂となる平成10年版『高等学校学習指導要領』が告示された。体裁は中学校課程がA5判9ページ、高等学校課程がA5判12ページで、「目標」「内容」「内容の取り扱い」で構成されている。さらなるコミュニケーション活動を支援するために、「目標」「内容」「内容の取り扱い」は学年別ではなく全学年で統合して表示されるようになった。

「目標」には、「言語や文化に対する理解」「コミュニケーションを図ろうとする態度の育成」「実践的コミュニケーション能力の育成」の3つを掲げている(図15を参照)。前回の「コミュニケーションを図ろうとする態度の育成」から「実践的コミュニケーション能力の育成」と改められることになり一段と強化された。そして「言語材料」は、中学校課程では

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う。
(平成10年『中学校学習指導要領』)

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力を養う。
(平成10年『高等学校学習指導要領』)

図15 日本の教育課程 平成10年『学習指導要領』(中学校・高等学校)の「目標」

「学習語彙」は900語(必修語彙100語)、「文法事項」は8項目、「文型」は21種類となり、高等学校課程では「学習語彙」は「英語Ⅰ」400語、「英語Ⅱ」500語、「リーディング」900語、「文法事項」は8項目、「文型」は8種類となった。また、コミュニケーション活動を促進させるために「言語活動の取り扱い」に「機能シラバス」を採用して「言語の使用場面の例」と「言語の働きの例」が提示されている(図16を参照)。

[言語の使用場面の例]

- a 特有の表現がよく使われる場面
 - ・あいさつ・自己紹介・電話での応答・買い物・道案内・旅行・食事 など
- b 生徒の身近な暮らしにかかわる場面
 - ・家庭での生活・学校での学習や活動・地域の行事 など

[言語の働きの例]

- a 考えを深めたり情報を伝えたりするもの
 - ・意見を言う・説明する・報告する・発表する・描写する など
- b 相手の行動を促したり自分の意志を示したりするもの
 - ・質問する・依頼する・招待する・申し出る・確認する・約束する
 - ・賛成する/反対する・承諾する/断る など
- c 気持ちを伝えるもの
 - ・礼を言う・苦情を言う・ほめる・謝る など

図16 日本の教育課程 平成10年『学習指導要領』(中学校)の「言語の場面と働き」

4. 2 コミュニケーション期の韓国の教育課程

1992年、大改訂となる第6次『중학교교육과정 (中学校教育課程)』第6次『고등학교교육과정 (高等学校教育課程)』が告示された。体裁は中学校課程がB5判40ページ、高等学校課程がB5判58ページで「性格」「目標」「内容」「方法」「評価」で構成されている。そして、大幅な変更点として注目されるのが、「文法シラバス」から「場面シラバス」へと転換を図ったことで「文型」と「文法事項」の指定が廃止されて新たに「의사소통기능과예시문 (コミュニケーション機能例示文)」が指定されたことである(表2を参照)。

1年生	2年生	3年生
<ul style="list-style-type: none"> • 소개(紹介) My name's Mary. This is my English teacher. • 감사(感謝) Thank you very much. You're welcome. • 전화(電話) Is Bill at home? Who is this, please? • 사과나변명(謝罪と弁解) Excuse me. 	<ul style="list-style-type: none"> • 소개(紹介) Let me introduce myself to you. Why don't you meet my brother? • 감사(感謝) Thank you for helping me. • 전화(電話) May I speak to Mr. Kim, please? • 사과나변명(謝罪と弁解) It doesn't matter at all. Excuse me for being late. 	<ul style="list-style-type: none"> • 소개(紹介) I'd like you to meet my father. • 감사(感謝) It's so kind of you to help me. I don't know how to thank you. • 전화(電話) Tell her that I'll call again. • 사과나변명(謝罪と弁解) I'm sorry (that) I kept you waiting.

表2 韓国の教育課程 第6次『교육과정 (教育課程)』(中学校)の「コミュニケーション機能例示文」

「目標」には、「コミュニケーション能力の育成」と「外国文化の理解」を掲げている(図17を参照)。「正確に表現できる基本能力」から「流暢に表現できる基本能力」と改め、文法的な「正確性」よりもコミュニケーションにおける「流暢性」が強調されている。そして、「言語材料」では、「学習語彙」は中学校課程が1050語(第1学年300語、第2学年350語、第3学年400語)に、高等学校課程は「共通英語」が1400語、「英語I」が2200語、「英語II」が3000語となった。

<p>쉬운 영어를 이해하고, 생각과 느낌을 유창하게 표현할 수 있는 기본 능력을 길러, 외국 문화를 올바르게 수용하여 우리 문화를 발전시키고, 이를 외국에 소개할 수 있는 바탕을 마련하게 한다. (簡単な英語を理解して思考と感情を流暢に表現できる基本能力を育てるとともに、外国文化を正しく受け入れて我が国の文化を発展させて外国に紹介できる基礎を準備する。)</p> <p>(1) 일상 생활과 일반적인 화제에 관한 쉬운 말이 나 글의 대용을 이해하게 한다. (日常生活や一般的な話題に関して簡単な言葉や文字の内容を理解できるようにする。)</p> <p>(2) 이해한 대용을 로대로 하여 말이 나 글로 간단히 표현할 수 있게 한다. (理解した内容を基礎として言葉や文字で簡単に表現できるようにする。)</p> <p>(3) 쉬운 말이 나 글로 상황에 적합하게 의사 소통을 할 수 있게 한다. (簡単な言葉や文字で状況に適したコミュニケーションができるようにする。)</p> <p>(4) 외국 문화를 이해함으로써 우리 문화를 새롭게 인식하고 올바른 가치관을 가지게 한다. (外国文化を理解することで我が国の文化を再認識して正しい価値観を持てるように)</p>
--

する。)

- (5) 우리 문화를 말이나 글로 간단히 소개할 수 있게 한다. (我が国の文化を言葉や文字で簡単に紹介できるようにする。)
(제 6 차 『중학교교육과정』)

외국어를 이해하고, 생각과 느낌을 표현할 수 있는 능력을 길러, 외국 문화를 올바르게 수용하고 우리 문화를 발전시키며, 이를 외국에 소개할 수 있는 바탕을 마련하게 한다. (外国語を理解して考えや感情を表現する能力を育てるとともに、外国文化を正しく受容して我が国の文化を発展させて外国に紹介する基礎を養う。)

- (1) 일상 생활과 일반적인 화제에 관한 말이나 글의 의미를 이해하고, 이를 자연스럽게 게이를 자연스럽게 표현할 수 있게 한다. (日常生活と一般的な話題に関した言葉や文の意味を理解して自然に表現する能力を育てる。)
- (2) 외국어를 통하여 다양한 정보를 받아들이고, 이를 활용할 수 있게 한다. (外国語を通じて多様な情報を受け入れて活用する能力を育てる。)
- (3) 외국 문화를 이해하고 바르게 수용하며, 우리의 문화를 외국인에게 쉬운 말이나 글로 소개할 수 있게 한다. (外国文化を理解して正しく受容して我が国の文化を外国人に簡単な言葉や文で紹介する能力を養う。)

(제 6 차 『고등학교교육과정』)

図 17 韓国の教育課程 第 6 次 『교육과정 (教育課程)』 (中学校・高等学校) の「目標」

1997 年、7 回目の改訂となる第 7 次 『中学校教育課程 (중학교교육과정)』 と第 7 次 『高等学校教育課程 (고등학교교육과정)』) が告示された。体裁は中学校課程が B5 判 66 ページ、高等学校課程が B5 判 81 ページで、構成は「性格」「目標」「内容」「教授・学習方法」「評価」となっている。今回の改訂で注目されるのは、初等学校第 1 学年から高等学校第 1 学年までの 10 年間を「국민공통기본교육과정 (国民共通基本教育課程)」と位置づけて校種間の連携を強化することで、「言語材料」を統合したことと、「習熟度別学習 (補充学習と深化学習)」を実施して基礎学力の徹底とともに発展学習への配慮という斬新な発想である。

일상 생활에 필요한 영어를 이해하고 사용할 수 있는 기본적인 의사 소통 능력을 기른다. 아울러, 외국 문화를 올바르게 수용하여 우리 문화를 발전시키고, 외국에 소개할 수 있는 바탕을 마련한다. (日常生活に必要な英語を理解し使うことができる基本的なコミュニケーション能力を育てるとともに、外国文化を正しく受け入れて我が国の文化を発展させて外国に紹介できる基礎を準備する。)

- (1) 영어에 흥미와 자신감을 가지며, 의사 소통을 할 수 있는 기본 능력을 기른다. (英語に興味と自信を持ちながらコミュニケーションをすることができる基本能力を育てる。)
- (2) 일상 생활과 일반적인 화제에 관해서 자연스럽게 의사 소통을 한다. (日常生活と一般的な話題に関して自然にコミュニケーションをする。)
- (3) 외국의 다양한 정보를 이해하고, 이를 활용할 수 있는 능력을 기른다. (外国の多様な情報を理解して活用することができる能力を育てる。)
- (4) 외국 문화를 이해함으로써 우리 문화를 새롭게 인식하고, 올바른 가치관을 기른다. (外国文化を理解することにより我が国の文化を新しく認識して正しい価値観を育てる。)

(제 7 차 『중학교・고등학교 교육과정』)

図 19 韓国の教育課程 第 7 次 『교육과정 (教育課程)』 (中学校・高等学校) の「目標」

「目標」には、「コミュニケーション能力の育成」と「外国文化の理解」に、さらに「自信を持ち」という表現が加えられ、「コミュニケーション能力」の強化を唱えている(図 19 を

参照)。そして「言語材料」では、初等学校の英語教育と「국민공통기본교육과정（国民共通基本教育課程）」への対応から抜本的に見直された。「学習語彙」は中学校課程が1250語（初等学校450語、第1学年200語、第2学年250語、第3学年350語）に、高等学校課程が「高校英語（「共通英語」から名称変更）」1700語、「英語Ⅰ」2300語、「英語Ⅱ」3000語となった。また、「의사소통기능과예시문（コミュニケーション機能例示文）」とは、「국민공통기본교육과정（国民共通基本教育課程）」による校種間の連携強化によって一括表示されることとなり、7項目47分野に347例文に統合された（図20を参照）。

<ul style="list-style-type: none"> • 소개(紹介) —자기 소개하기 (自分の紹介) △ I'm Chi-young. △ My name's Chi-young. Let me introduce myself (to you). —다른 사람을 소개하기 (他者の紹介) △ This is my friend, Min-ho. I'd like you to meet my father. I'd like to introduce my friend to you. —소개에 답하기 (紹介への応答) △ Nice to meet you. I'm glad / pleased to meet you, Mr. Kim. It's pleasure meeting you. I've been looking forward to meeting you. 	<ul style="list-style-type: none"> • 감사(感謝) —감사 표현하기 (感謝表現) △ Thank you (very much). △ Thanks a lot. I'm very grateful. I appreciate your help. It was very nice of you to help me. —감사 표현에 답하기 (感謝表現の応答) △ Sure. △ You're welcome. △ (It's) My pleasure. Don't mention it. I was delighted to be able to help.
--	--

図20 韓国の教育課程 第7次『교육과정（教育課程）』（中学校・高等学校）の「コミュニケーション機能例示文」

5. まとめと考察

本稿では、学習環境や教育制度において極めて類似点の多い日本と韓国の英語教育を比較分析することを目的として、戦後から現在に至るまでの両国の教育課程（日本：『学習指導要領』、韓国：『교육과정（教育課程）』）を「草創期」「文型・文法期」「コミュニケーション期」の3つの時期に分類して、その「目標」と「言語材料」に焦点を当てた分析を試みた。教育課程の通時的な比較分析という手法を取り入れたことで先行研究では解明されなかった成果を得ることができたのが本研究の意義である。まず、教育課程の「目標」については、日本も韓国もともに戦後まもなくの教育課程では「英語使用国民の文化を理解すること」という英米文化への「同化主義」から出発した。やがて、「英語使用国民の文化」は「外国文化」や「国際理解」へと表記が改められたがその含意するところは両国ともに英米文化の理解への傾注に過ぎないものであった。その後、日本に続いて韓国も高度経済成長を経て国力が増強されて経済的に成熟した後によく真の意味での異文化理解への関心が高揚して「多言語・多文化主義」へと移行していることが明らかになった。次に、教育課程の「言語材料」については、日本も韓国もともに戦後まもなくの教育課程には具体的な表記は見られなかったが、省庁が告示する形式となる法令化と同時に「学習語彙」や「文法事項」などの細目が厳格に規定されるようになった。また、日本の「ゆとり教育」と期を同じくして韓国においても「평준화정책（平準化政策）」という学習内容の精選が行われてきたが、日本と異なる

のは「言語材料」における「学習語彙」の削減規模が少なく既に横這いから増加に転換していること、「文法事項」の移行措置（従来の中学校課程の学習事項を高等学校課程の学習事項へと移行して学習させる措置）の取り扱いは行わずに戦後から今日まで一貫して中学校でひと通り全ての文法事項を学習することが韓国の英語教育の特徴となっている。さらに、近年の TOEFL のスコアを参照してみると、韓国のスコアの伸びは著しく、既に 1998-1999 年には世界平均レベルに達し、その後は今日に至るまで継続してそのレベルを維持しているのに対して、日本のスコアの伸びは鈍くて世界平均レベルに及んでいない状況にある。（検証する必要があり推測の域を超えないが）日本と韓国の英語教育における「言語材料」（「学習語彙」と「文法」）の量的な格差にその一因であるという可能性を排除することはできないのであろう。この他、日本で深刻化する学力低下問題の対策においても、韓国の『교육과정（教育課程）』の「국민공통기본교육과정（国民共通基本教育課程）」による校種間（小学校・中学校・高等学校）のカリキュラムの連携や習熟度別学習による基礎学力の徹底と発展学習への配慮は非常に興味深い取り組みである。このように、日本の英語教育が韓国の英語教育から学ぶべき点は少なくないのである。今後の課題としては、本研究では取り扱うことのできなかった教育課程の下位区分（例えば、「聞く」「話す」「読む」「書く」の 4 技能や「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」「リーディング」「ライティング」などの各科目）の比較分析などを行うことで本研究の成果をさらに発展させたいと考えている。

註

- 1) 韓国の『교육과정（教育課程）』の資料には교육부 (1999, 2000) と교육과정연구회 (1990a, 1990b) をを用いた。
- 2) 教育課程の改訂周期は韓国の『교육과정（教育課程）』も日本の『学習指導要領』と同様に 10 年ごとが慣例となっていたが時代に即応した改訂が必要であるとの判断から弾力化されている。
- 3) 1970 年に漢字撤廃運動が本格化するまではハングルと漢字の混合文が普及していた。なお、本稿における韓国の『교육과정（教育課程）』の日本語訳は筆者によるものである（以下同様とする）。
- 4) 発音の指導に関しては「教授上の注意」で Daniel Jones の *The Pronouncing Dictionary* に準じたアメリカの標準的な発音を奨励している。
- 5) 韓国の高等学校教育課程における語彙数の表示法は伝統的に加算方式が採用されている。
- 6) 現行の第 7 次『고등학교교육과정（高等学校教育課程）』では、ドイツ語、フランス語、中国語の他に、スペイン語、日本語、ロシア語、アラビア語を加えた 7 言語が第 2 外国語の選択科目として設置されており教育課程のみならず検定教科書までも整備されていて第 2 外国語学習が充実している。
- 7) 韓国政府は 1968 年に『국민교육헌장（国民教育憲章）』を制定し、「創造力と開拓精神」「国家優先の共同精神」「反共民主精神と愛国愛族」を理念とする国民の精神面の統一を国策とした。冷戦が終結するまでは憲章全文がすべての教科書に掲載されるなど韓国の教育政策に多大なる影響を与えた。
- 8) 1988 年はソウル五輪の開催年で当時の韓国経済はオリンピック景気、ドル安、原油価格の下落、国際金利の低下など諸要因が重なり未曾有の好景気を迎えていた。

参考文献

- Brumfit, C.J. & Keith Johnson. (eds.) (1980) *The Communicative Approach to Language Teaching*. New York: Oxford University Press.
- 伊藤嘉一 (1997) 「韓国の英語教育」『英語教育』1997年3月号 大修館書店, 38-39.
- 伊村元道 (2003) 『日本の英語教育200年』大修館書店.
- 木村祐三 (2002) 「東アジアにおける英語教育からの示唆 第7次教育課程下の韓国のEFL」『英語教育』2002年7月号 大修館書店, 42-44.
- 清永克己 (2000) 「日本と韓国の教育課程における言語材料に関する研究」『鳴門英語研究』第14号 鳴門教育大学英語教育学会, 49-60.
- 国立教育政策研究所 (2001, 2007) 『学習指導要領データベース』国立教育政策研究所.
- 교육부 (1999) 『초·중·고등학교국가수준의교육과정기준』교육부.
- (2000) 『초·중·고등학교외국어(영어)과교육과정기준』교육부.
- 교육과정연구회 (1990a) 『韓國教科教育課程의變遷: 中学校』대한교과서.
- (1990b) 『韓國教科教育課程의變遷: 高等学校』대한교과서.
- 大谷泰照 (1997) 「韓国の外国語教育事情」『英語教育』1997年11月号 大修館書店, 12-15.
- 津村敏雄 (2007) 「日本と韓国の英語教科書及び大学入学共通試験における使用語彙の比較研究」東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻 修士論文.
- 馬越徹 (1981) 『現代韓国教育研究』高麗書林.
- Wilkins, D.A. (1976) *Notional Syllabuses*. New York: Oxford University Press.